

京都大学や北海道大学など全国6大学の付属病院は、がん患者一人ひとりの遺伝情報をもとに最適な治療法を探る「個別化医療」を2019年度にも始める。がんに関わる200種類以上の遺伝子の変化と投薬歴や治療効果をまとめたデータベースをつくり、精度の高い診断や効果的な治療につなげる。

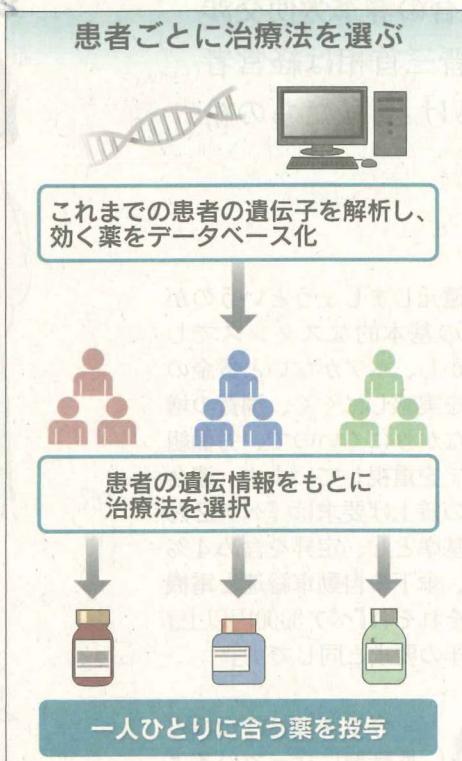
日本人の2人に1人が一生のうちにがんを患うとされ、同じ薬でも効き目が違う患者が知られ始めた。がんの種類ごとに標準の薬などが決まる。從来の治療法は見直しを迫られている。今回あらゆる種類のがんを対象に全国規模でデータを集約し、海外で使う薬を含め幅広く治療法を考える試みとなる。

## 京大など、投薬データ集約

# 患者別の「最適」探る

▼個別化医療 一人ひとりの患者の病状に応じて治療や投薬の方針を見つけ、最適の医療を施すこと。「オーダーメード医療」などとも呼ぶ。遺伝子の変化を繰り返すがんの場合、変化に伴い効く薬も変わることを調べれば効く薬が分かり、治療の幅が広がる。遺伝子の変化と治療効果のデータを蓄積すれば、個別化医療の精度が高まる。

京大や北大など先行して遺伝子解析に取り組む病院が協力してデータを蓄積する。岡山大学、千葉大学、佐賀大学、東京医科歯科大学の付属病院も参加する。日本医療研究開発機構が18年度までに5億5千万円程度を支給する。がんの治療は肺や胃とともに特定の薬を使うのが普通だが、がんの遺伝



# がん治療 遺伝情報共有

つた例がある。たとえば京大病院では十二指腸がんの遺伝子の変化を調べて肺がん薬の効果が高いなどとわかり、新たに投与してがんの進行を止められた患者がいるという。今後は、こうしたノウハウをデータベースを通じて各大学が共有する。遺伝子の変化に関する情報手掛かりに、他のがんの治療や海外で使う薬などが治療の候補になるかどうかを洗い出す。

がんの種類別に特定の薬を使う従来の方法に加え、これまでにない組み合合わせも選択肢に入る見込みだ。

計画では、患者の希望に応じて遺伝子を解析し、18年度までに開発すべきデータベースを参考にしている。データベースを参考に

なる。遺伝子の変化の仕方によっては、別のがんに使う薬が効くようになる場合がある。ただ、遺伝子の変化を調べて効きやすい薬を選ぶには、知識や経験が必要だった。これまで京大や北大では、普通の薬が効かない患者でがんの遺伝子を調べ、治療薬や治療法を探していた。実際に各大学の経験やひらめきが治療につなが

る。遺伝情報に基づくがんの個別化医療が国内外で注目を集めている。遺伝子の解析が低コストでできるようになった技術革新も追い風になる。

患者一人ひとりのがんの遺伝子を解析し、治療効果を含むデータを蓄積して診断の精度や治療の効果を高める取り組みは米国が先行している。10

治療方針を決める。その年から一部の大学病院が診断を始め、データの蓄積を続けている。

日本人の治療成績は日々向上し、一人ひとりに最適な治療法を提案し、主治医

や患者の確認を経て治療に移る。標準の薬や治療法が効かない患者や、治療が無いまがんの患者が対象となる。国立がん研究センターなどもがんの遺伝子の情報を蓄積してきたが、対象は肺や大腸のがんなどに限られ、新薬の開発計画への参加を促すのが目的だった。

がんの種類別に特定の薬を見極めれば、無駄な投薬を減らせる。がん免疫薬「オブジーボ」をはじめとする画期的な新薬も、患者全員に効くとは限らない。適正な使い方によって、医療費の増加を抑える効果も期待できる。